ISSN 0918-8770

兵　庫　教　育　大　学

近　代　文　学　雑　志

第二十九号

２　０　１　８

兵庫教育大学　近代文学雑志　第29号

2018年

目　次

井伏鱒二著作調査ノート（その九）
——『井伏鱒二全集』別巻Ⅱ掲載「著作目録」以後——　前田　貞昭…… 3

劉宋の隠士、王素の「学阮歩兵体」詩とその擬作背景について
鈴木　敏雄……一

井伏鱒二未公開書簡の活字化に関わる諸課題
——井伏の手書き資料（書簡・自筆原稿）にみる特徴を踏まえて——
田中　雅和……一三

井伏鱒二関連正誤表二点　前田　貞昭……三三

編輯後記

▲「恩師は死なない」ことになっているはずなのに、一昨年の冬から昨年の春にかけて、私を井伏鱒二研究や書誌研究の領域に導いて下さった方々の訃報が相次いだ。2016年の暮れには磯貝英夫先生が2016年１月13日に亡くなったとの報に驚いていたところ、年が明けて2017年４月18日に寺横武夫さんが亡くなり、８月末には東京で会った若い友人たちから山内祥史先生も４月３日に亡くなったことを教えてもらった。

▲山内先生の個人研究誌『太宰研究』（のち『太宰治・研究資料』）を真似て本誌を始めたし、「井伏鱒二著作調査ノート」などの横書きのスタイルも、先生の『太宰治』〈人物書誌大系７〉の模倣である。井伏鱒二全集が終わった頃（先生の推薦もあって全集に関わる運びになったと筑摩書房の中澤信吾氏から聞いていた）、中澤氏と一緒に食事に招いて頂いた。四国は観音寺の不良少年で、自転車のチェーンを振り回していた、というお話を伺ったのはその席であった。『若き日の日野啓三』『太宰治の『晩年』』と御著書が続いていたので御元気だと思っていたし、磯貝先生と同じように見守って下さっているという感覚がずっとあった。

▲井伏鱒二全集進行中、本文確定作業のため、頻繁に滋賀大学教育学部の寺横研究室に通った。研究室へ向かう廊下から中庭の木々に見とれていた私に、寺横さんが「あと、何回見られるか、と思うようになるのは年取った証拠だ」と冗談半分におっしゃったことが思い出される。筑摩書房からは、担当の中澤氏か面谷哲郎氏の参加。一日の作業が終わると、３人でJR石山駅附近で夕食。寺横さんは、季節を問わずビール党であった。

▲『近代文学試論』第20号（1983年６月）で井伏鱒二特集（二）を組んだとき、大学院在籍中の綾目広治・遠藤伸治・藤村猛・丸川浩の４氏の担当で「井伏鱒二著作年表」を掲載した。渓水社から『井伏鱒二研究』（1984年７月）を出す計画が持ち上がっていた頃だったか、記憶は定かではないが、寺横さんから著作年表の誤謬・遺漏を指摘する手紙が届いた。ベスト・エッセイ集『木炭日和』『おやじの値段』に収録作をお持ちの文章家だけに、ブルーブラックのペン書きで、機知に溢れた文面であった。

▲指摘があった以上は無視できない。しかし、書誌などという領域に関心を持っている方は神経質で気難しいに違いない。加えて、寺横さんの場合は、学会などにも姿を見せない怖い方だという噂が重なる。そんな大先輩に「資料を寄越せ」（たとえ、丁寧に申し上げたとしても、実質はそういうことだ）などとお願いしたら、きっとお叱りを受けるに違いない（江戸時代ではないが「屹度叱り」なんていう文言が頭の中をヒラヒラした）……「怖いもの見たさ」などということは一切ない。とすれば、誰かが上京して調査しなければなるまい。

▲著作年表には私も関わるところがあったので厄介な事に巻き込まれたものだと思いはしたが、書誌に興味がありそうなメンバーはいないし、既に就職していた（出張費が貰える）私が、その役割を担えば万事丸く収まるような雰囲気が濃厚で、その雰囲気に気圧されて東京へ調査に出かける羽目になった（ように記憶する。被害妄想かもしれないが）。調査に取りかかれば、井伏書誌に漏れている作品や書籍が、日本近代文学館の書庫から続々と目の前に現われる。立ち寄った西秋書店で、月刊文章編輯部『わが小説修業』（厚生閣、1939年）と出会ったのも、この時だったと思う（店主が声が掛けて下さり、御言葉に従って某書店で井伏の自筆原稿を見せて貰ったことも思い出す）。始めると新出資料が出てくるから面白い。寺横さんからの手紙が井伏の書誌調査を始める切っ掛けだったのだが、井伏全集まで御一緒させてもらうことになるとは、予想もしなかった。お目にかかってみれば文章をお書きになるときの繊細さを、後輩にそのまま出されることは一切なく、伸び伸びと全集編輯作業に関わらせて頂けた（という配慮をして下さっていたのだと、今更ながら思う）。

▲鈴木敏雄・田中雅和の両氏に乞うて、ようやく本号の体裁が整った。模倣（詩）という視角から中国文学史を捉える鈴木氏には本誌などには勿体ない御論考を賜わり、また、国語学関係で困った時の相談相手で、常に理の通った明解な助言を下さる田中氏には、御多忙な中、書簡翻字の大きな課題を含む御論考を頂いた。その課題は、いつものように筋の通った課題である。だが、難題だ。2019年３月には私は定年退職なのでと言い訳をしたいが、それでは、せっかくの御論考が無駄になりかねない。これまでも書簡翻字の素稿に修正を重ねてきたのだが、田中氏から与えられた課題に応えるべく、さらに補訂を加えてゆきたい（と書かないとイケナイのだろう）。

（前田貞昭）

兵庫教育大学　**近代文学雑志**　第29号
ISSN 0918-8770
〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1
兵庫教育大学大学院 教科教育実践開発専攻
言語系教育コース（国語）
前田研究室
TEL.＆Fax.0795-44-2083(ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ)
E-mail：sadm@hyogo-u.ac.jp
印刷　株式会社フジワラ　　2018年2月20日発行

（非売品）